

【モータースポーツコラム】

筆者：皆越 和也

＜ニュル24時間レースに取り憑かれて20年＞

ニュルブルクリンクというレーシングコースを知ったのは1990年。レース専門誌編集部先輩が「ニュルブルクリンク24時間ってレースがすごいんだよ。200台以上が走るんだぜ！」と持ち込まれたポジフィルムをルーペで確認しながら呟いていました。

うわっ、森の中のコースじゃないですか。しかも2段バンクのついたヘアピンコーナーまであるし。「え？ お前ニュル知らないの？ F1で(ニキ)ラウダが瀕死の火傷を負ったコースだよ」

そんな会話を聞いていたのか、これまた先輩ライターが「9 Days in Summer」というビデオを貸してくれました。そのビデオは短編映画で1967年のF1、フォード・コスワースDFV開発のドキュメンタリー。

ニュルの“フリュークプラッツ”(=飛ぶポイント)で4輪が浮くF1、2段ヘアピンの“カルツセル”(=メリーゴーラウンド)の下段を豪快に走るF1といったシーンもあり、すごいコースなのだ認識したものです。



ニュルは第一次大戦後の1927年に、失業者対策として産業に乏しいアイフェル山中に作られたグランプリコース。

1周約20kmのノルトシュライフェ(=北周回路)という高低差300mのアップダウンに富んだコースがあり、ここは世界各地の路面がそろっているということで、自動車メーカーやタイヤメーカーのテストコースとしても使用されています。

そんなコースに初めて行くことができたのは2001年のこと。スポーツ雑誌でニュル24時間レース取材することになったのです。40歳になって初めてのドイツ。そして初めてのニュル24時間。カメラマンと一緒に深い森の中のノルトシュライフェへ。コースサイドの一部はキャンプ村になっていて、でかいドイツ人たちがバーベキューをしながらビールを飲み、大音響でヘビーメタルをかけながら思い思いに楽しんでいます。

カルチャーショックでした。スナップ写真を撮っていると、肉食って行けとかビール飲んで行けと誘われて、一発でハマっちゃいました。



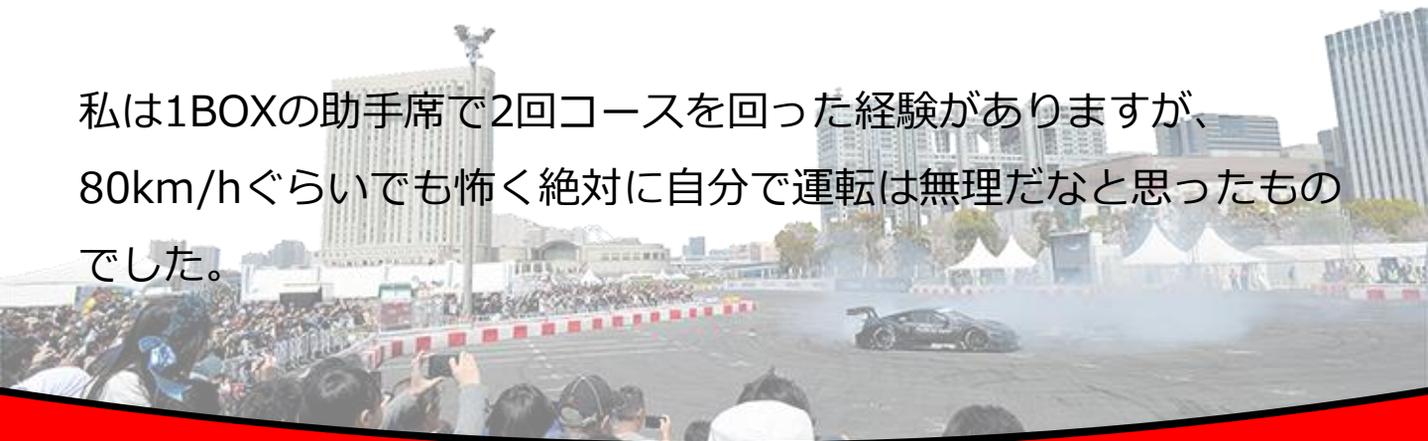
翌年からは日本のタイヤメーカーのお手伝いをする事になり、2005年まで5年連続の取材。5月に24時間が開催されれば、シュパーゲル(白アスパラガス)にありつけます。それはもう最高でした。

でもご存じのように、ニュルはレースウィークには必ずと言っていいほど雨が降ります。大陸の雨はものすごく、大変な雷雨になることもあればピンポン球大のヒョウが降って来ることもあります。ある年は、森の大木に落雷があり、木の下に避難していたカメラマンや観客が数名亡くなったこともあります。

もちろん危険はドライバーにも迫ります。200km/hを超えるようなスピードで、横方向ばかりか縦方向のブラインドコーナーが連続する難コースです。ちょっとした接触やミスでコース外へ落ち、命を落としたドライバーは何人もいます。

ある、日本人ドライバーは、「必ず衣服を畳んでからホテルを出てサーキットへ向かう」と言いますし、あるドライバーは「最後の300km/h出るストレートはパンクしたら終わりだから、グランプリコースに戻って来るとホッとする」と言います。

私は1BOXの助手席で2回コースを回った経験がありますが、80km/hぐらいいでも怖く絶対に自分で運転は無理だなと思ったものでした。



でもそこがニュルの麻薬性なのかもしれません。

2006年に日本のチームが出場しなかった年こそお休みしましたが、翌年からは毎年、何かしらの仕事を取って通いました。経費は自腹です。ライターのくせにカメラの機材も年々プロみたいになり、コースサイドにいる時間も増えて行きました。

さっきまでカメラを構えていた場所に、クラッシュした車両が裏返しに突っ込んだとか、自分の脇でスピンを喫しヒヤリとすることは良くあります。もちろん事故が続いたことで立入禁止の場所もありますが、こんなにコース近くで写真撮って良いの？　と思うぐらい自由です。

コース外でも、10年以上おいしいイタリアンレストランのマンマと仲良くなり、毎年通っています。またサーキットのメインゲートまでクルマで10分という宿にも毎年泊めてもらえるようになりました。もちろん5月であれば、到着した夜はニュル城の下のレストランで、アンガス牛のステーキとスーパーゲルをビールで流し込みます。



ところが、新型コロナウイルスの影響で、昨年はずいぶん連続取材記録も13でストップしてしまいました。

今年は6月3～6日の開催予定ですが、4月上旬の時点で日本人はドイツへ入国できません。

もし入国できたとしても6月なのでシュパーゲルにはありつけませんし、感染予防のために今年も無観客となるかもしれません。

さらに帰国しても14日間は成田のホテルに缶詰めです。コロナ禍がなければ、今年で20回目の取材になったはずなのですが…。

また早く、平和にレース取材ができるようになればと願っています。そうならば、いつものように帰路に古城が建つライン川沿いを走り、好きな鉄道写真を撮りながらフランクフルト空港へ移動できるのですから！





(プロフィール)

皆越和也 (みなこし かずや) / 熊本県出身 1961年生まれ
20歳で普通免許を取得後にクルマに興味を持ち、1987年から月刊誌でレースの取材を開始、1990年にモータースポーツ専門誌編集部へ。ツーリングカーや耐久レースを中心に取材し、スーパー耐久やGTレースはスタート時より多くのレースを現地で見て来た。出版社を退社後はPR代理店でメーカー系チーム広報のサポートを経験。2011年に郷里の熊本へ移住し、今年もスーパー耐久シリーズとSUPER GTシリーズの全戦を取材予定

